
アストライア

蓮千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アストライア

【Nコード】

N7835D

【作者名】

蓮千里

【あらすじ】

自分の評判はどうでもいい。親友との約束、過去の非力さ、そして罪。全てを独りで背負う旅人の話。短編にある、『俺の審判は……』の長編版です。

序章という名の挨拶。

神々が地に足をつけていた頃。

その星は争いが無い、笑顔に満ち溢れた星であった。

だが歳月を重ね、次第と人間達と距離を置くようになり、神々は次々に天界へと帰っていった。

しかし、数人の神々は人間に説き伏せ、共に歩もうと手を差し伸べていた。

神々は人間達の笑顔を取り戻したかったただけなのだが、その行為は人間達の救いにはならず、

いつの間にか人間に神々の姿が見えなくなり、同時に声も届かない状況に陥いると残っていた神々は何も言わず天界へ去った。

神々の手がつけられないほどに人間達は殺戮を繰り返して、地を血に染め上げていたのだ。

「むやみな殺戮が我力で避けられる時代を信じ、我力の一部をこの森に封印しよう。」

我力が必要ならば、それ相応の力を要求す。正義の名に恥じぬ者だけが我力解放せん」

上記、天秤村の伝説より。

とある満月の晩。

小さな村に野太い悲鳴が届いていた。

それは1度や2度で終わらなかった。

立て続けに上がっていく悲鳴には、驚きと恐怖の色が色濃く混じっているのがよくわかった。

悲鳴の主達は女や子供ではなく、大の男達の野太い声に間違いはない。

だが村人達は誰も家から出ず、聴こえない振りをする者ばかり。

……自分の生命いのちと他人の生命いのちを天秤にかければ、当然の反応だと言える。

それが普通の反応であり、決断だ。

悲鳴に混じってかすかに聞こえる刀のぶつかり合う音に関しても同じこと。

「利口な考えだ」

きつとあの旅人がこの場にいたら、そういうに違いないと村人達は強く思った。

そう、村人達は知っていた。

こついう事態になるということ。

自分達が生き残る最善で最短の道を、ひとりの旅人に願い出たのだ。

旅人は嫌な顔ひとつせず、あっさりそれを受け入れた。

旅人にとつても最善で最短の道だから。

月は満月。

雲もなく星も見える空の下で大の男達が次々と息の根を止められていく。

1本の刀で心臓をえぐられた者もいれば、横に縦に切られた者もいた。

小さな村が数キロ離れたところに在る、決して大きいといえない一本道がどんどん封鎖されていく。

通れなくしているのは、男達の死体。

一本道には死体の山と血しぶきがいたるところに飛んでいるのがよくわかる。

雲も無いので満月の光が全てを照らしだす。

だから正体が分かる。一体、誰がやられていて、誰がやったのかはつきりと。

全身まである薄汚い白色をした羽織。

それについているフードをしっかりと被っていて顔は見えない。

羽織を留めているのは肩から腰に巻かれた2本の茶色い革ベルト。

そしてそれは前も後ろも、互いに交差したように巻かれてあるため、身体は羽織をしっかりと包み込まれている。

背中の中点には赤い鞘がしっかりと固定されていた。

簡単に動きそうに無い。

羽織の下から覗く腕は生なので、羽織の下はおそらく半袖類。

最も、今は全てが朱に染まっているがこの者 “旅人” は全く気にしていないようだ。

死体を築きあげている旅人だが、すれ違ったとしても決して記憶に残るタイプではない。

背丈は160センチ前後 早い話が華奢な部類。

こんな死体の山を作る空気は身にまとっていない、むしろどこにもいる旅人。

そんな旅人が、死体の山を築き上げている。

“ 偏見はよくない ”

旅人はそんな言葉を人々の脳に刻みこんでしまう。それはもう、あつさりど。

一つ一つの技を繰り出す度、刀を一振りする度に見え隠れする幾多の古傷。

その中でも一番深く見える真つ直ぐな傷跡は、伊達に修羅場をくぐっていないことを物語っている。

「うおらあっ！」

大人数だった盗賊団も頭を入れて、現在生存者は自分を抜いて2人。前方に盗賊の配下、後方に頭がいるこの状況を人は挟み撃ちという。左右に逃げれなくも無いが、死体が邪魔で少々骨が折れそうだ。

軽く嘆息した旅人だが、頭の中にある辞書に“逃げ”の文字は無い。頭とその配下が同時に自分に向かってくるのを察すると、

旅人は叫びながら一瞬で間合いをつめ、迷わず配下の鳩尾みそおちにすばやく拳を放つ。

腹に食らえば大抵の人間はくの字形なり一瞬の隙が出来るので、そこから切りかかれればいいのだが……旅人は上に飛んだ。

直後。

男の短い声と、生暖かい血が飛び散っていく。

敵は2人で、自分を挟み撃ちで攻撃してきたのだから、同士討ちにするのは容易い。

旅人が配下にだけ攻撃し、上に飛んだのは同士討ち（これ）を狙っていたからだ。

苦渋に満ちた表情で頭は上を向く。

旅人は上に飛んだのだ。だから上に視線を移動するのは当然なこと。

しかし。

「仲間割れか？」

頭に届いた言葉は、上からでなく真後ろから聞こえてきた。

旅人は、顔についた真新しい血をぬぐいもせず、口元に笑みを浮かべ、

真後ろにいる盗賊の頭に背中越しに問う。

完全にからかっている口調だが、背中越しに伝わる殺気は凄まじい

ものだった。

今さっきまで着地音も気配すら感じさせなかったのに。

今はまるで殺気すらを武器にしてくるようだと頭は思った。

自分の背後に潜んできた旅人を、この世のものではない異形いぎようの者・
・・・否。

すでに妖あやしとして認識していた。

だからなのだろうか。

頭の目はギョツと大きく目を見開き、嫌な汗が全身から吹き出して
いるのは。

頭は背中越しに旅人の視線を感じ取っていたが身体は動かさない。

否。

動かせないのだ。旅人の殺気が全身に突き刺さっているために。

現実にはありえないことだと分かっているても逃れられないのは最悪
の現実だ。

そんな頭に旅人は言う。

「弱い奴等・・・・お前も弱いんだろ？ なんだって“類は友を
呼ぶ”って言うしな」

そしてその声は、頭を呪縛から解く鍵となった。

旅人に焦りの色は決してないが、頭はそこに気づかないだろう。

「餓鬼があっ！」

相当血が上っていたのか、はたまた短気な性格なのか旅人の挑発に応えるかのごとく、

巨身にあった大きな刀を振り向きがてら振り落とす。

たった今、己の配下を切ってしまった刀で旅人に切りかかる。

互いの間に間合いはない。

“間合いは自然に出来てるんじゃないさ。間合いは自分で作るんだ。間合いに限らず、ね”

「……お前には教えてもらってばかりだったな、白夜」

遠い昔の言葉の記憶が旅人の脳裏をかすめた。

それは本当に昔のことなのに、つい昨日のことな錯覚をおかしてしまふ。

そしてその錯覚は、自分に大切なことをタイミングよく教えてくれるのだ。

ガキン！

ただ一度、刀同士のぶつかった音がしたかと思うと

「あばよ」

そんな旅人の声がその場に響く。

旅人は何事も無かったかのように立ち上がる。

同時に“何か”旅人の後ろで倒れる音と刀がその場に落ちる音もした。

しかし、旅人は後ろを振り返らない。

自分の後ろにあるのは、死体だと分かっているから。

つい先程、“自分の真後ろにいて切りかかってきた”盗賊の頭の死体だ。

間合いがなかった状況で何故旅人が生きているのか……それは単純な動作なのだが神業といえるだろう。

旅人が利用したのは身長差と一瞬の隙。

自分をはるかに凌ぐ巨身の盗賊が振り返り際に刀を振り下ろした時、確かに旅人は愛刀で斬撃を受けた。

そのまま押し合いになっていたら死体になるのは旅人に間違いない。

盗賊の頭もそれを狙っていたはずだ。

だが、まさにこの攻撃を旅人は待っていた。

斬撃を受けたほんの数秒後、旅人は愛刀と共に一気に身を沈めたのだ。

当然、相手は巨身なので足などは地に着いたままだろう。

だが旅人は、ほんの一瞬でよかったのだ。

とにかくほんの一瞬、相手のリズムを崩せば十分に”間合いはとれた”のだから。

しかし、それでも時間としてはとてつもなく短い。

よくもまあその隙に相手の上半身と下半身を別個に出来たものである。

ゴロゴロ転がっている死体の道を蹴散らし、血の池に足を踏み入れながら旅人は進んだ。

迷わずに真っ直ぐと進む旅人。

その先にあるモノはただひとつ。

「 さつさと村長のところ行くか、白夜」

フードを下ろしながら旅人ははつきりと口にした。が、どこを見ても生きている人影は見当たらない。

「お疲れさん、白夜。今日も汚ねえ血で染まっちゃったなあ」

右手に持った刀に月の光を浴びせるがごとく、真っ直ぐ空へ突き出した。

生々しい血がついたままの刀は、月の光を浴びて怪しく光る。

自身のフードを千切り取り、刀を手元に引き寄せ、丁寧に血をふき取っていく。

「この服、まだ新調して4年も経ってないけど、仕方ないよな、白夜」

苦笑交じりの声で旅人は“白夜”に同意を求めた。

だが変わらず人の気配を感じない。

かすかな風が静かに拭き抜けた時、旅人は足を止めて空を見上げた。

「……………俺達はずっと一緒だぜ？」

空に向かって口を動かし、同時に刀を突き上げる。

拭きぬけ続けていた風が全てを揺らす。

月明かりが何もかもを照らし出す。

朱に染まった旅人の羽織も．．．．漆黒のセミロングも、曇りの
無い真っ直ぐな黒い瞳も。

刀を掲げた右腕に刻まれた、痛々しい真っ直ぐな傷跡も羽織の下か
ら顔を見せている。

旅人の全てが暗闇に浮き出された。

女だということを、誰かに見せ付けるように月明かりは照っている。

ただいまの生存者数は、ゼロ。

旅人．．．．．もとい、彼女の名は杏^{あんず}。

強さを求めて強者^{つわもの}とよばれる達を狩っていく自由気ままな旅をしている18歳。

大切な親友と競うはずだった約束を果たすべく生きている。

大切な親友が自分に託した願いを破らないよう、期待に応えるように心がけ生きている。

他のことはどうだっていい。

自分の名前も、存在価値も、評判もどうだっていい。

親友との約束が守れているのなら、自分も親友も共に高みにいけると思っから。

愛刀の名は白夜^{びゃくや}。“自分が殺した親友”の名で、生きていれば丁度20歳になる青年。

「10年、か」

綺麗に血をふき取った白夜に目を落としながら、杏は呟いた。

その表情はとても複雑で、黒い瞳はどこか遠くを見ているようだ。

杏の足は止まっても風は吹き、月も全てを照らし続ける。

先程までの元気はどこにいったのか、杏はトリップしたかのように固まっていたが、ゆっくりと足を動かし村へと向けた。

序章という名の挨拶。（後書き）

俺の審判は・・・・・・・・を書き直していたら短編どころじゃなくなりました。

連載として再度UPさせていただきます。

短編を知る人も知らない人も、アストライアをよろしく願います。

次話でお会いできるまで・・・・・・・・

蓮千里

杏と白夜

10年前

「子供の部なんてつまんねーし、かつたりいよなあ」

「強ければ年齢なんて関係ないのにねー」

杏とその親友、白夜の生まれおちた天秤村で大きな大会が開かれた。

村自体は小さいのだが、武器や装備はどれもが一品で有名な村。

格闘技なども盛んだったため、子供から大人まで誰もが思い思いに己を磨いていた。

杏と白夜も例外なく遊んでいる。

遊ぶといっても、一般的な子供のように鬼ごっこやら縄跳び、かけっこなどと生ぬるい遊びではない。

杏が4歳、白夜が6歳の時は体術、6歳と8歳の時に格闘技、そして8歳と10歳の時に剣術を2人は共に学んだ。

学んだ、といってもこの2人に大人がついたことはない。

杏も白夜も、早々に両親を亡くしていたため、村長の家で3度の飯と寝床を使っていた。

杏の母親は数々の名刀を、白夜の父親は天秤村きつての強者で名を知らぬ者はいなかった。

そして、杏の父親と白夜の母親は 2人して行方知れずになっている。

杏と白夜に様々な知識を村長夫婦や村人達は教えたが、実戦に関しては教えていない。

自然と2人で研究し、腕のよさそうな者達の動きを観察しあい、それを元に互いに技を編み出していた。

そうして2人ならではの技を身につけ、実践し、弱点などを指摘し合う……そんな日課が遊びとなっていた。

だから、この2人の遊びに参加する子供はひとりも出たことがない。

いくら武器や格闘技が盛んでも、杏と白夜に混じって遊ぶことほど自殺行為は無いからだ。

それほどまで2人の実力は飛びぬけていた。

第一、 真剣を使った剣術は最低12、3歳からしかできない。

それまでは木刀などで剣術の基礎を磨くのだ。

それが天秤村の基準且つ決まり。

だが2人が8歳と10歳の若さで真剣の所持を認められた時、村人達の認識が、“特別な存在”から“天上人”になったのはいうまでもない。

俊敏さと柔軟さ、素直さが売りの杏。

対して全てにおいてオールマイティーな白夜。

杏が勝つことは少なかったが、白夜の指摘や技術を素直に認め、自分のモノにしていくのが楽しくて仕方が無かった。

例えばそれが、一種の生死をかけた遊びであろうとも。

2人は毎日のように相手に切りかかり、殴りつけ防御する。

服がズタボロになろうが泥まみれになろうが関係ない。

こういうことが2人の遊びであり、笑顔が尽きることも無い時間だった。

そしてそのことを村人達の誰もが知っていたから、今の2人の会話を苦笑するしかないのだ。

『これより、武具大会・大人の部の受付を開始します。

尚、武器を所持する方は同意書を持ってエントリーしてください。

繰り返します

□

子供の部が終わった1時間後に響いたアナウンスで、猛者達が腰を浮かしエントリーをしに足を向ける。

杏や白夜の周りにいた大人達も、大半がいなくなっていた。

天気の良い昼下がりの闘技場近くの休憩所に残ったのは杏達と数名の見物人のみ。

ぶーたれた白夜が愛刀の手入れをしながら「大人の部が受け付け始めたか」と呟けば、

「ブキノシヨジってなに？」とのんびり訊ねる杏。思わず愛刀を落とすような脱力感を覚えながらも、白夜は杏にわかりやすく教える。特大の青筋を浮かべながら。

「……………一般的武器を使えるってことだ」

「アタシの朝陽あさひと白夜の夕陽ゆづひも使えるってこと？ずっーい！」

たった今、2人の村で開催されている『武具大会』の子供の部で白夜と杏は優勝と準優勝を決めていた。

最年少の杏が準優勝で白夜が優勝なのはいわなくともわかることだ。

しかし、この2人が参加したせいで、優勝候補といわれていた強者つわもの

達がものの数秒で姿を消して言ったのは言うまでもない。

ちなみにこの武具大会は殺さなければ、武器の所持は自由。

ただ、それは大人の部しか関係ない。

大人と見られるようになるのは18歳を超えてからで、今の2人には当然先の話だった。

所詮、武具大会の子供の部というのはオマケに過ぎない。と2人は確かに思っている。

そして、『武具大会』ではなく『体術大会』だとも。

体術が嫌いではない。

だが、2人にとって退屈な試合ばかりが続いたのは事実。

100人あまりで始まったトーナメントで手応えがある対戦相手も1人もいなかったのだから、

2人共、相当なストレスが溜まっていたらしい。

決勝戦での2人の対決がそれを証明していた。2人は開始の合図が始まると同時に、今までとは違う……桁違いの力を出して試合を進めていることは素人の見物人達にもはっきりとわかる。

出し切れないでいた力が、ようやく出し切れる……そんな思いも見物人には伝わっていた。

本気で殺しあうような殺気もヒシヒシ伝わってきたのだが、2人の表情を見てしまうと何も言えなくなってしまう。

2人は戦いの中、始終笑いあっていたのだ。

不気味な笑いではない。心底楽しんでいる、本当に無邪気な顔で互いに技を繰り出していた。

殺し合いを楽しんでいるのではなく、純粹に武道を楽しんでいる、そんな光景が繰り広げられ、

試合に決着がついたのはおよそ1時間後。

杏の右拳が白夜の顔面向けて放たれ、まさにあと数センチで入るという時、

白夜の右足が杏の左脇腹にヒット。勿論杏の右拳が誰もいない空間を切ったのは言うまでも無く、

完全にバランスを崩されたところを、白夜の右拳が下から杏の顎に入り　杏は数分間目を覚まさなかった。

大会のルールとして闘技場（100m×100）の場外で身体の一部でもついたら負け。

そして場外でなく、闘技場内で3分間気絶してしまうと負け。

杏は後者に当てはまってしまったのだ。

「あーそれにしても悔しいーい！あんな負け方するなんてっ！」

思い出したくないことは、不意に思い出すものだ。

杏が一言、天に向かつて吼えれば、

「確かに」

容赦なく肯定する白夜がいる。

「オトメの心を傷つけるなんて！」

「……お前、どこでそんな言葉覚えてくんだ？つか漢字で
言え、漢字で」

「知らないもん」

「威張るな。1334敗のくせに」

「酷っ！1340敗なのに！」

「……そっちに怒りがいくのか」

杏の百面相や言動は幼さを強調させる意外になにもない。

その上、頬をいっぱいいっぱい膨らませ、そつぽを向けば尚更だ。

そんな杏に言葉を返すのは白夜といえば、年齢の割りには恐いほど
落ち着いている。

杏の言葉にツッコミや相づちが打てるのは彼だけであろう。

「そついや、白夜。さっきの試合で8割は手え抜いてたつしょ！」

「人のこと言えんのかよ」

噛付かんばかりの表情で杏が咎めれば、深いため息をつき、挑発気味に返す白夜。

どうやら見物人達を圧倒させた試合は、わずか2割の力のぶつかり合いだったようだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

両者の目から火花が散る。

というか、まるで終わる気配が無い。どうやら第三者が入らなければ終わりそうもない。

だが、誰がこんな危険な空気の中に入れるのだろうか。

誰もがそう思っていたときだった。

「杏、白夜。そこまでしなさい」

「ここにいるのはあなた達だけではないということをおぼれたのかや？」

「村長？」

天秤村の村長とその妻が、ひょっこりと2人の間に割って入ったのだった。

杏は驚き、白夜は不思議そうに村長夫妻を映し出す。

「何故、100%の力を出さなかったのだ？」

静かに村長が問うと

「「あんな狭いところで戦えば、死人がでるから」」

打てば響く。まさにぴったり当てはまるように杏と白夜は村長に返す。

さも当たり前だともいうように。

2人にとって戦いとは遊びと同じ感覚。だから互いにガードも反撃も出来る。

だが、それが100%発揮できるのは広い場所限定。

常に使用する場所、天秤泉のある森のように広いフィールドでの戦いが彼らを伸ばす。

しかし狭いと戦えないわけじゃない。

ただ、その場合は力を極力セーブしないと事故を起こしかねない。

だから2人は試合が終わってもスッキリした表情ではないのだ。

はあ……とため息をついた村長は、「お前達、遊んできなさい」と脱力したように顎で促した。その先にあるのは2人の遊び場。

同時に2人は何事もなかったように目を輝かせ、村長の言葉に賛成するや否や、風を切り裂くように2人は走り出した。

彼らの“遊ぶ”という感覚は一般人からかけ離れていることなど村人達は勿論、

今日来た見物人達も承知していた。

が、やはり笑い顔と一つ一つの仕草を見てしまうと、まだ子供なのだと再確認させられる。

それは村長夫婦もかわらない。

村長の一言があるまで火花を散らしていた2人だが、遊べるとなると怒りは収まるものなのだろう。

「見た目はそこらの子供と変わらないのに………」

村長の妻が、孫をみるような瞳でいうと

「ああ、そうじゃな。だが、運命さだめがある」

その夫である村長が重々しい口調で答えると悲しげな瞳で頷く村長の妻。

2人は知っていた。いや、これは誰もがわかっていることだが、多くの者達はそれを忘れているのだ。

本能がかき消してしまうから、忘れてしまう。

中には自分の意思で目をそむけるものもいると思うが………
大半は本能だろう。

“人は運命さだめが生まれながらについている。”

“その運命さだめからは、いかなることをしても逃げられない。”

“一度逃げても、運命さだめはつきまとうのだ、生きている限り。果てしなく。”

夫婦は思う。『飛びぬけた才能も、天秤村に生れ落ちたのも運命さだめだ

と』。

村長は言う。

「アストライアを手にした者としての運命^{さだめ}」だと。

「それは、運命^{さだめ}というより証ですね」

天秤村の村長夫婦は、先程まで目の前にいた2人の姿を思い出す。

その目には、本当に普通の子供の姿が映っている。

長い漆黒の髪をポニーテールにし、赤い布で結び、白いシャツに同色のキュロットスカート。

そして茶色い革ベルトを腰に巻き、背中には赤い鞆に収まった愛刀・朝陽を背負っている杏。

対して白夜は杏より頭ひとつ分背が高く、男にしては長めの亜麻色の髪をなびかせている。

額には常に赤い布が巻かれていて、前髪を押し上げるのが白夜のスタイル。

そのため、杏と同じ黒く曇りの無い瞳がよく見えた。

服装は杏と変わらない。キュロットスカートが長ズボンに変わっただけだ。

愛刀・夕陽は黒い鞆に収められ、彼の腰に刺さっていた。

天秤村でこんな格好をした子供は沢山いる。いや、どの村や町を覗いても珍しくもなんともない。

ただ、杏の持つ朝陽と白夜の持つ夕陽は、2刀で1組の刀として作られた名刀。

2刀とも柄の部分に天秤座をかたどった絵柄が掘られている。

天秤村という名前だから掘られているわけではない。

何を意味しているのかきちんと知っている者も非常に稀だ。

だからこそ、刀は村の象徴として代々村長達が受け継いできた。

絵柄の意味と刀を守るのが村長の役目でもあるのだったが、刀の使用許可をもらった杏と白夜が

迷うことなく手に取ったのが朝陽と夕陽。

村長夫婦は勿論躊躇したのだが、使い手の瞳は譲らない色をしたまま、鞘から取り出され、

ヒュンツと二重の音を奏でた。

たった一振りです村長は感じ取った。刀も2人を主として認めた、と。

杏と白夜が朝陽と夕陽を交えるたびに、それぞれの刀も成長しているように見えた。

最も2人にとっては遊びなのだが。

「ほら、天秤泉てんびんせんにいくぞ」

「わーってるって!」

白夜の声に負けじと大きく応える杏が走り出す。そんな光景を村人達は毎日目にしていた。

そして同時に關心してしまう。

『よくも恐くないな』、と。

天秤泉とは村の外れにある小さないわくつきの泉がある場所のことで、彼らの遊び場。

いわくとは、泉には冷静且つ公平な判断を下す女神アストライアが眠っていて、

一度でも泉に近づく者は誰であろうと何時も監視され、アストライアの逆鱗に触れれば容赦ない審判が下されるというものだった。

単なる昔の言い伝えかもしれないが、村人達は好んで天秤泉に行くとはしない。

そのため泉の周辺はまるで手入れがされていなかったが、2人にとっては好都合だった。

ただっ広い平地だけで遊ぶのはうんざりするのだ。

自身を極めるためには、どんな場所であろうと対処できなければいけないのだから。

杏と白夜（後書き）

10年前のお話、その1です。

まだまだ過去の話がありますが、一度ここで区切ります。
では、又お会いできることを祈りつつ……

蓮千里

瞳（め）に映るものは幻覚、脳に焼き尽くしものは約束

「・・・・・・・・」

天気は良いのに気分は最悪だ。いや、最悪になったと言っべきか。

夢から覚め、重い瞼をのろろと開き、顔をしかめた杏はゆっくりと上半身を起こす。

額の汗に気づく余裕もない程、杏は憔悴していた。

深呼吸をしはじめたが、なかなかうまく出来ないのは夢を見たせい
か、それとも・・・・・・・・。

杏の意味ではなく、自然と手が口を塞いだ。

そうすることで、杏はなにかを堪えているようだった。

見開かれた瞳に、何が映っているのかは本人しか知らない。

「まだ、見るんだ・・・・・・・・見えるんだ、まだ」

か細く、抑揚の無い声で、杏は呟く。

言葉から察するに、たった今まで見ていた夢をもつ見ないと思っ
ていたんだろう。

だが10年前の武具大会の日の出来事は、8歳の子供には重過ぎる
出来事だった。

簡単に忘れることなど出来ない、どうあがいても。

最も、天秤泉での出来事まで見なかったのは杏にとって不幸中の幸いといっている。

もし見ていたら、きっと起き上がる気力も無かつただろう。

ここ数年見ていなかっただけに、免疫力も落ちているだろうから。

「天秤泉に行くところで切れたのは、この光のおかげだな」

黒い瞳を細めながら杏は青く澄み切った空を見上げた。

まるで、10年前村で行われた武具大会当日のような空だ。

杏が言った光とは太陽のこと。

太陽の位置がほぼ真上に来ていることから考えて、正午だと推測できる。

昨夜の暗闇に光を射す月とは違う、強い光。

『眠りすぎたな』と杏は心で呟いて今度こそ村の村長の下へと足を運びだす。

昨夜は強烈に臭った血のにおいも、今となっては少しばかり薄れたようだ。

だが、未だにある死体にはカラスや小さなハエなどが群がっている

のが目の端に捕らえられた。

「……………あーそか。俺が帰るまでここには立ち寄るなって言
ったな、そーいや」

何故、未だに死体の処理をしていないのかと思ったが、しつこいほ
ど自分が言ったのをようやく思い出したらしい。

身体についた土をはらいながら立ち上がった杏は、村へ続く一本道
を進んでいく。

村人達にも事態は飲み込めているはずだが、

自分が帰るまでにこの場所に立ち寄ればただでは済ませないと、

散々脅しておいて酷い仕打ちだと思うが『まあ大目に見てもらおう』
などと考えている杏は鬼としかいえない。

「村長に服も新調させてくれと頼むかな」

苦笑交じりに朱に染まった羽織と服を見て杏は言う。

やはり

鬼だ。

しかしこれだけ破れや黒い染みがつくと流石に新調して欲しいと思
ってしまう。

白夜を持っていなければ、単なる乞食と変わらない格好とってい
い。

だがこの村は小さいため、そんな融通が利くとは思えない。

「ま、駄目元で言うしかねえか」

軽く息をついて少しばかり歩を早める杏は、村へ続いている森へと足を踏み入れた。

全てを揺らす程度の風が吹く。

木々が草々が花々が気持ちよさそうに揺らされる。

その度に自然の匂いが杏の鼻孔をくすぐった。

「気持ちいいなあ、白夜」

杏は気持ちよさそうに伸びをし、歩きながら白夜に話しかける。

声はしなくとも、杏の言葉に同意しているような感覚が襲ったのは気のせいではないだろう。

愛刀は昔からそうだった。

杏が悲しければ泣いてくれ、笑えば一緒に笑ってくれた。

いわば以心伝心。

そして良き相棒なのだ。

「なあ白夜」

なにもかもが10年前の武具大会の日を思い出させる。

場所も時代も違うのに、この澄み切った感じから周りの景色から思い出してしまふ。

だから口に出してしまう。

10年間、いまだ答えをもらっていない問いが。

「何で、助けたんだ　？」

“俺だけ、何で守られたんだ？”

“どうしてお前は、言ってくれなかったんだ？”

「俺達が、狙われてるって、俺は、気づいて、なかったんだぜ？白
夜・・・・・・・・」

最初は語尾がかすかに震える程度だった言葉が、だんだん涙声に変わっていく。

じわりじわりと出ていた涙も、今では頬を伝って地面に落ちて吸収されていた。

上を見ても空は見えない。

深緑の葉が揺れ、音を奏でている様子も涙が邪魔をしてはつきりが見えないが、

その音は10年前を思い出させるのに十分な演奏だ。

『あの夢を見ていなければ、きっとこんなに悲しい音には聴こえてないはずなのに』

そう思う杏の足はいつの間にか止まり、黒い瞳がついに幻覚を映し出した。

「っ！！」

息を呑む杏。

だが、これは幻だと本能が言っている。わかりきっている。

でも。杏は動けない。

目の前に、10年前自分が殺した親友が横たわっているのだ。動けるはずが無い。

そしてなにより、血の生々しい匂いが彼女を落としていく。

「・・・・・・・・びゃ、くや？」

10年前、自分が殺した親友の名であり、愛刀の名前につけた人物、名を白夜。

彼は、あの時と同じように横たわっている。

目は半目で血だらけなのに、光は強い。

そして彼は言う。

“ 約束、な？ ”

音は聴こえない。

だが、ゆっくり動いた口は確かにそう言っていた。

瞬間。

杏はいやおうなく、夢の続きを鮮明に思い出す。

彼女の心の奥深くに眠らせていた記憶が、今、眠りから覚まされた。

「はっ！なんだ？その攻撃は！」

天秤泉について早々、2人の遊び・・・・・・・・・・はたから見れば死闘が始まり、早3時間が過ぎた頃。

杏の蹴りを軽々とかわし、土を蹴り上げながら上へ飛んだ白夜が言い放つ。

対して杏は、そんな白夜を追うように跳躍し背中に背負った朝陽に手をかけたが

「遅いつ！」

そんな白夜の声と共に、上から振り落とされた足技によって朝陽を取り出すことはおろか、

そのまま地面に身体を叩きつけてしまう。

が、『痛い』と思う暇も無く、白夜が夕陽を取り出す気配を感じ取る杏。

瞬時に飛び起き、まだ痛む右手で朝陽を取り出した瞬間。

刀と刀がぶつかった時の『ガキン!』という音と、強い衝撃が杏を苦しめる。

『ここで気を緩めれば、確実に自分は負ける』と、本能が告げた。

自分と白夜の力には差があることは重々承知している。

だからこそ一瞬の隙もつくってはいけない。

「こ、ここで気をぬく、わけには………?!」

齒軋りする杏を前にした白夜は、ニツと笑いながら杏の視界から突然消えた。

同時に力までなくなったので思わず前のめりに倒れる杏。

刹那。

目の前に刀が現れ、杏は真つ二つにぶつた切られた………と
いうのは冗談だが、

黄泉の世界に足を入れそうになったのは事実だった。

「押し合いだけが戦術じゃねーんだぜ?杏」

「う、五月蠅いっ!」

白夜は自ら屈みこみ、夕陽を横に振ったのだ。

辛うじて朝陽でガードできたのは、杏にとって奇跡に近い。

それでもやはりほんの一瞬ばかりおそかったようだ。

杏の服は腹の辺りに横一線をひかれていた。

朝陽で防御するタイミングがずれた証拠だ。

前のめりの体制でガードしているので反撃するにも出来ないのが杏は悔しくてたまらない。

まだ、手もしびれている。

『負ける』

その言葉が脳裏をかすめた瞬間、夕陽が朝陽を杏の手から空高く舞い上げた。

そして同時に

ドスッ

鈍い音をたてて杏のみぞおちに白夜の拳がクリーンヒット。

そのまま後ろに立っていた樹木に、杏は身体を預けたまま動けなくなってしまうが白夜の夕陽が勢いよく真横に振られ

杏のポニーテールが容赦なく切り落とされた。

流石の杏もこれには寿命を縮めたのか、まるで瞳に光がなくなっている。

光を失った瞳は白夜を見ているのか、それとも探しているのか、はたまた何も見えていないのかわからない。

放心した杏を見た白夜は、ポリポリと頬をかくと容赦なく杏の頭にチョップを食らわせる。

「?!おわっ!」

「おー戻ってきたな」

汗と共に瞳に光が戻った杏は、恨めしそうに頭をさすりながら目の前にいる白夜を見るが

当の本人は、いたって涼しい顔をして「気、抜きすぎ」と言いながらデコピンを食らわせ、

「朝陽を持ってきてやる」と言い残し、杏の前から姿を消した。

杏は膨れっ面をしながらその場に座り込み、近くに落ちた漆黒の髪の毛をツンツンと触った。

結構気に入っていただけに、ものすごく白夜が憎たらしい。

「白夜の人でなしいい……………」

杏は白夜が戻ってくるのを確認してから声に出した。

小さな声だが、森が静かなせいでどんな音も響くのだ。

白夜は笑いながら「お前が未熟だからだろ」と返して朝陽を差し出す。

最もな返事なので、杏は朝陽を無言で受け取るが白夜は朝陽から手を離さない。

「白夜？」

「杏、勝負しようぜ？」

2人の言葉はほぼ同時だったが、杏は素っ頓狂な声をあげ目をパチパチと瞬きをした。

意味が分からない。

『勝負なら毎日やっているのに、何故今頃？というか、なんで真剣^{マジ}な顔をしているんだろ…………』と

様々な疑問が頭の中を駆け巡ったが、それより早く白夜の口が開いた。

「俺と、お前のどちらかが

！？杏っ！」

白夜の怒鳴り声と、この場に似合わない無数の銃声が天秤泉の森に響き渡る。

しかし杏は目の前の状況が理解できなかった。

突然でありにも一瞬のことだからなのか、はたまた本能で理解し
たくないと感じたからなのか杏には分からない。

今の杏は疑問ばかりに捕らわれていた。

“ どうしてアタシは地面の上に転がっているの？ ”

アタシは樹木に寄りかかっていたのに。

“ どうして白夜の身体が自分の上にあるの？ ”

アタシとの距離は確かにあったのに。

“ どうして白夜から生ぬるいものが流れているのか……ここ
の赤く生ぬるい液体は何……？ ”

アタシは攻撃をしてない。ましてや朝陽をちゃんと返してもらった
わけでもないのに。

なんで、白夜から血が流れているの？

瞳（め）に映るものは幻覚、脳に焼き尽くしものは約束（後書き）

妙なところで区切りました、アストライア第3部です。

白夜と杏の遊びの部分が、第1部と同じことに気がつくしましたか？

では次ぐにお会いできるのを祈りつつ・・・・・・・・

蓮千里

意志と覚悟

なんで、白夜から血が流れているの？

そんな様々な杏の疑問を掻き消したのは、聞きなれぬ男達の声。

そして男達こそが全ての元凶なのだと杏は直感で感じ取った。

自然と身体がこわばっていく。

だが、男達の声はどこまでも能天気で、心底楽しそうなのは幻聴ではないだろう。

「おーおー。いっちょ前に女をかばったか」

「流石は天才少年。俺達の気配を感じたのか？」

「いやぁお譲ちゃん、助かったねえ？」

天秤村では見かけない3人の男達が下品な笑いと共にこちらに向かってくる。

簡単に言えばノッポとダルマ、そしてヒゲ面という面々だ。

十中八九、ヒゲ面が頭なのだろう。

ノッポとダルマがヒゲ面を守るような陣形でこちらに向かっている。

武器はノッポが銃、ダルマが刀、ヒゲ面は銃と刀を所持しているのがわかった。

しかし疑問は残る。

3人の顔ぶれに杏は心当たりが無い。きっと白夜も同じだろう。

そして、この3人は武具大会の参加者ではないと直感的に感じた。

「あ、あんた達、なんの、ためにっ!？」

白夜をのけ、彼を守るような形で杏はよろめきながら立ち上がり、問いかける。

勿論、手には朝陽を握って構えをとった状態で。

言葉が震えるのは恐怖からではない。

怒りで震えているのだ。

大の大人が不意打ちで自分達を狙ったこともそうだが、杏は自分自身に怒りを覚えた。

この3人の気配を感じ取れなかった自分に。

白夜が身を挺して自分のことを救ったことに。

“ 助ける時は、自分自身も無傷でいられるようにならなきゃな ”

いつだったか、白夜は確かにそう言っていた。

なのに、現実には180度違うではないか。

身体が汗と白夜の血で濡れているが、そんなこと気にしない。

とにかく、白夜は一刻を争う状態なのだ。

「絶対、許さないっ！」

杏は自ら3人に突っ込んでいく。

この行為はあまりにも無防備で、あまりにも無謀。

普段の杏ならそんなことは頭にあるはずなのに、彼女は走り朝陽を振りあげる。

目指すはヒゲ面の男のみ。

だがその間にノッポが銃を乱射してくる。

鍛え抜かれた杏の身体能力をもつてしても、無数に放たれた弾丸を避けきけることは不可能である。

それでも杏は必死に動いた。急所に当たる弾丸だけはかろうじて避け、さばき、致命傷を免れている。

「……………肝の据わった譲ちゃんだ」

ヒゲ面がそう口にしたと同時に、ダルマが刀を前方に突き出すようにして杏に突っ込んできた。

杏は瞬時に上に跳躍してダルマの攻撃から逃れるが、ノッポが銃を向けているのに気がつき、

空中で方向転換。そして地面に着地しようとした　　が！

「身軽だねえ、譲ちゃん」

そこにはヒゲ面という先客が刀を構えて杏のことを待っていた。

杏は朝陽で迎え撃とうとしたが、ノッポが放った銃弾をわき腹にくらい一瞬の間を作ってしまう。

そしてそれをヒゲ面が見逃すはずなく

「おりゃあっ！」というヒゲ面の野太い声と共に、刀が杏の右腕に深く真っ直ぐな傷を負わせる。

傷は右肩から手首にかけてかなり深く切られてしまい、流石の杏も動きを止めてしまった。

腕の傷だけならまだしも、急所が外れているとはいえ銃弾もあびすぎた結果だ。

自分自身の血によって白かった服は、ほぼ朱に染まり、いたるところに穴が開いていた。

自分の周囲の草花や樹木、大地が真新しい鮮血で彩られている。

たった1色の赤色という色で。

『銃弾は全部貫通してる………か?』

骨などで銃弾が止められていたら厄介だ。

銃弾を取り出すのは、痛いと言ったことがあるからだ。

だが今の杏の状態ではどちらも五分五分である。

「さて。お遊びはここまでにしようか、お譲ちゃん」

ヒゲ面が正面に、ノッポは右側、背後にはダルマが各々の武器を持ち、杏を取り囲む。

逃げるとしたら左しかないが、そこは天秤泉。

アストライアが眠る聖域。

何時もこの場所で鍛錬してきたことを思い出すと、これ以上汚すわけには行かないと本能が訴えた。

だが、窮地に陥っている今、そんなことを言っている場合ではない
と知っている本能があるのもまた事実。

こうして判断に迷っている間にも3人はジリジリと杏を追いつめて
いる。

そしてなにより白夜の命が絶つかかもしれないのだ。

「さあ、天才少年があのだで待つてるよ？」

朦朧とした意識の中、ヒゲ面が口開く。

だが、もう言葉を返す気力が残っていない。

立つだけでも困難な状況に陥っている。

ここに着いてからぶっ通しで遊んでいたし、一応、武具大会にも出
た身。

体力・精神力が削がれているのは当然といえる。

今の状態で分かったのは、ヒゲ面がいう天才少年が白夜をさしてい
ることだけ。

『アタシ、頑張ったよね……』

力が全身から抜けていくのがはつきりと伝わる。

血と汗が溢れ出す。止まるということを知らないかのように。

『白夜 ?』

無二の親友に杏は心の中で呼びかけて、死を受け入れようとした。

アストライアの眠る聖域で、無二の親友とともに眠ることが出来る……そう考えると恐くない。

「うあゝ ああああああつ!」

目を閉じた瞬間、杏の耳になにかが聞こえた。

それは真後ろからした声 簡単に言えば断末魔なのだが、

杏の意識は朦朧としていたため、はっきりと瞬時に判断できなかった。

その証拠に首も目もあらぬ方向を向いている。

今の杏は夢と現実が区別ついていないのだ。

ぼんやりと見える視野でしか区別がつかないのだろう。

本能で何かがあったことはわかっていても、限られた狭い視野ではなんの情報もつかめない。

そんな時、ぼやけた視界が不意に暗くなった。

「……………杏に、手えだすな」

辛うじて聞こえた声に過剰反応し、のろのろと顔を上げていく。

ぼやけた視界が一瞬にして鮮明になった。

だが、驚いて声も出ない。

杏の後ろに血だらけの白夜が立ち、血で染まった夕陽をヒゲ面に向けてガンを飛ばしている。

「杏、こつちだ」

白夜は夕陽をしっかりとヒゲ面に突き出しながら杏の左手を取り、引き戻す。

杏の真後ろにいたダルマは、白夜によって心臓を貫かれたらしい。生々しい液体が止まることなく流れて、もう生きていないことは一目瞭然だった。

（ダルマから流れる血によって、出来上がっていく池に足を入れる

と同時に)

『行くぞ!』と白夜の声で駆け出した杏だったが、その足は1発の銃弾によって失敗に終わる。

白夜には及ばないが杏自身もかなりの傷を負っている上、体力も身体についていけない。

血も流しすぎた。

自分が転んだので白夜までもが全身を地に着けて、うつ伏せになっているのが見えた杏は

『……ごめん、白夜』と、無言の声をかける。首を動かすことも、目を動かすのも苦痛だ。

しかし痛みのおかげで意識があるのは不幸中の幸いというもの。

朝陽がきちんと自分の手に握られていることも認識できる。

そして、いまだ動かない白夜のことも見ることが出来るのだ。

最も、瀕死の状態が改善されることは無かったが。

『立たなきゃ……』

そして、白夜を連れて行かなくちゃ。

失いたくない親友を見捨てたくない、その一心で朝陽を握り返す杏。

その瞳は未だ光は途絶えてなく、視線はしっかりと白夜を捕らえている。

しかし、その対象となっている白夜といえば

“・・・・・・逃げろ”

そう瞳が言っていた。

首は動かさず、黒い瞳に宿った光が今にも消えそうな状態で、白夜は強く訴えてくる。

『逃げろ』、と言う瞳は杏の背中を強く押す感覚を与える。

確かに傷の深さを考えれば、杏は助かるだろう。急所に傷は負っていないし、痛みをこらえれば走れないことも無い。

でも。

“いや。絶対に嫌だ”

そついう思いをこめて白夜に訴える杏の瞳^め。

“絶対、嫌だ。絶対、負けない”

この気持ち、杏の身体を駆け巡る。

自然と朝陽を握る感触が強くなる。

右腕の血はまだ静かに流血しているが、構っている余地は無い。
痛みと引き換えに杏が起き上がった瞬間。

突然影が出来、何かが顔に当たった。

それは生暖かく、馴染んだ鉄の匂い 紛れもない血の匂い。

顔を上げなくとも分かる。

（血を流しているのが誰なのか、はっきりと断言できる。）

だが。

だが、わからない。

理解できなかった。理解しようとも思わない。

「逃げ、ろ」

ただの一言で現実が問答無用で杏を襲う。

「・・・・・・・・くや」

声にならない声で反射的に口を己の手で覆う。

顔を上げることができないまま、目の前にある足を凝視して杏は固まった。

立つことも忘れ、ひたすら目の前の足を見続ける。

ウエヲ ムクノガ コワイ、カラ

さっき自分の手を引いてくれたのは誰？。

「くや？ びゃく」

しっかりと手を引いてくれ、森を駆け始めたのは誰……？

「白夜っ！」

窮地を救ってくれたのは、誰？

さっきまで同じような窮地にいたのに、“逃げろ”と強く瞳で言うてきたのは誰？

「い、いやあああ！」

疑問が頭の中で飛び交う中、杏は弾けたような悲鳴をあげながら顔をあげた。

想像を超えた現実が、目に飛び込んできた。

ヒゲ面によって身体を中心に貫かれた白夜の姿。

刀の切っ先から白夜の血が、流れ落ちている。

今まで想像したことなんてなかった。

白夜が、大切な親友が刀によって串刺しにされるなんて考えたこともなかった。

否。

考える必要がなかった。

自分達は、それだけの力が常人よりも備わっていると自負していたから。

けれど。

涙でぼんやりと見える光景には、その全てを壊された。

意志と覚悟（後書き）

久しぶりの投稿です。

なかなか進みませんが、一度でも読んでいただけると幸いです。
長くなりそうですが、よろしくお願いします。

では、またお会いできることを祈りつつ……

蓮千里

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7835d/>

アストライア

2010年10月23日13時51分発行